出る杭研究　動物飼育が大学生の孤独感に与える影響

大森水葵・永澤美保・茂木一孝・今野晃嗣・石原淳子・小手森綾香・菊水健史

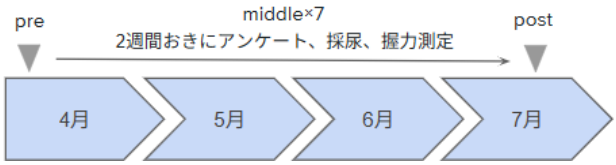
研究の背景と目的

【背景】
・ペットを飼っている13～19歳の学生は、ペットを飼っていない学生に比べて孤独感のスコアが低い。(Black, 2011)
・ペットを飼っている子供は、飼っていない子供よりも高い自律性を示す。(Van Houtte & Jarvis,2002)
・小児期のペット飼育は、思春期のメンタルヘルスの不調を軽減する。
(Gadomski et al.,2015) (Endo et al.,2020)

【目的】
動物飼育などの生活の環境や心身の特徴、尿中ホルモン濃度が大学生活への適応にどのように関わるかを調べる

研究・調査方法

【対象】
一人暮らしの麻布大学1年生(男性3名、女性10名)
【実験方法】
・アンケート(計9回：pre,middle×7,post)
・採尿(計7回：middle×7)
ELISA法で尿中のコルチゾール・クレアチニン濃度の測定
→生理指標として解析に含めた
・握力測定(計8回：pre,middle×7)
【統計解析】(JMP Ver.19.0.3)
pre・post:相関分析(Spearman順位相関係数)、 middle:一般化線形混合モデル



pre	middle	post
・基本属性 ・入学前の家族/友人との交流頻度 ・BIG-5 ・UCLA孤独感尺度 ・主観的孤独感 ・SNS利用	・家族/友人/親しい友人/その他の人との交流 ・前日の過ごし方 ・UCLA孤独感尺度 ・主観的孤独感	・Well-being (WHO-5) ・SNS利用 ・生徒の主観的幸福感質問票(SSWQ)

結果と考察

【動物飼育との関連】

動物飼育と孤独感に関連は見られなかった

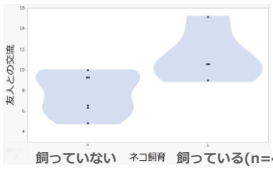


図1:ネコ飼育有無による友人との交流人数の比較

ネコ飼育者と
友人との交流人数は
有意傾向が見られた
(図1)

【pre】

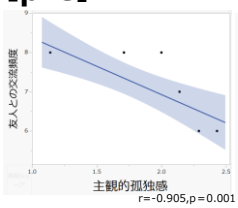


図2:孤独感と友人交流頻度の相関

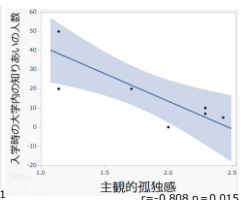


図3:孤独感と知りあいの人数の相関

【post】

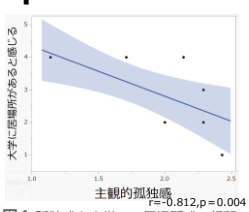


図4:孤独感と大学への居場所感の相関

Preでは**友人との交流人数**が多いほど**孤独感**は低く(図2,3)
Postでは**大学への適応感**が高いほど**孤独感**は低かった(図4)

【middle】

○当日の主観的孤独感への影響(ラグ0)
友人との交流人数に負の関連
睡眠時間と負の関連

○前週の行動の影響(ラグ-1)
有意な関連はなかった

○当日と前週の要因を同時に考慮したモデル(ラグ0、-1)
友人との交流人数に負の関連(図5a)
親しい友人との交流人数-1に正の関連(図5b)

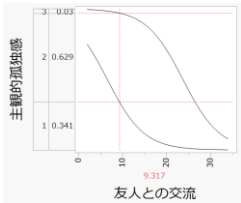


図5a:当日の友人交流人数

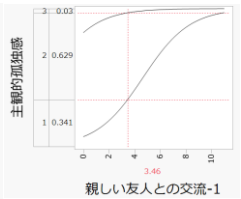


図5b:前週の親しい友人との交流人数

図5:日々の生活習慣が当日の主観的孤独感に与える影響
(予測プロファイル)

これから

今後はサンプル数を拡大して解析の精度を高めるとともに、飼育種別の詳細な分類や、オキシトシン・腸内細菌叢といった生理指標との関連を多角的に検証することが課題である。